

シンポジウム抄録

専門・認定技師の意義と実際

現在、我々診療放射線技師が担当する様々なモダリティーに対して、多くの専門・認定技師資格が存在します。それらの資格取得には、各モダリティーでの経験年数はもちろん、様々な学会への入会から始まり、学術大会参加や研究発表でポイント取得しながら自ら知識や技術を身につけることが求められます。皆様の施設では、資格によって多少の違いはあるものの、苦勞して取得した資格が普段の業務で十分に活かされているでしょうか？

本大会のシンポジウムは、専門・認定技師の資格を取得することの意義や、取得後の実際の業務における活用法、そして問題点や課題を議論し、今後の業務で有効活用できるようにするためのヒントを見つけることを目的としております。

シンポジストには大学病院、総合病院、単科専門病院、検診施設、クリニックと異なる規模の施設から、多種多様な専門・認定有資格者に、それぞれの立場から普段の活動や資格の有効的な活用方法、問題提起などをお話しいたします。特別講演としてCT専門技師認定機構と日本血管撮影・インターベンション専門診療放射線技師認定機構の理事にお越しいたし、機構の視点から現状と今後の展望などをお話しいたします。さらに現役技師長より、認定有資格者の現場運営について管理職の立場からお話ししていただきます。

それぞれの立場から、さまざまな問題提起がされると思います。それらに対し、今後我々がどのように専門・認定資格を活用していくべきなのか、さらに若手の診療放射線技師が専門・認定資格取得にチャレンジしていくためにどのようなことを進めていくべきなのかを皆さんと一緒に議論し、考えて行ければと思います。

若手、中堅、ベテラン、管理職まで年代を問わず多くの皆さんがご参加くださいますようお願いいたします。

座長

三ツ井貴博（市立旭川病院）

阿部 匡史（日本医療大学）

特別講演 1

「日本 X 線 CT 専門技師認定機構について」

日本 X 線 CT 専門技師認定機構 代表理事 井田 義宏（藤田医科大学病院）

「日本血管撮影・インターベンション専門診療放射線技師認定機構（JAPIR）の現状と今後の展望」

日本血管撮影・インターベンション専門診療放射線技師認定機構 理事長 坂本 肇（順天堂大学）

特別講演 2

「認定・専門資格の施設対応について」

市立旭川病院 中央放射線科 技師長 畑中 康裕

シンポジスト（発表順）

CT 専門委員会	虻川 雅基（札幌医科大学附属病院）
放射線治療専門委員会	佐々木文博（手稲溪仁会病院）
アンギオ専門委員会	北 裕一（北海道循環器病院）
消化管・超音波専門委員会	松井 麻未（札幌がん検診センター）
乳房画像専門委員会	堀田 浩（さっぽろ麻布乳腺甲状腺クリニック）
医療情報専門委員会	濱口 裕行（北海道大学病院）

「専門・認定技師の意義と実際～X線CT認定技師～」

CT 専門委員会 虻川 雅基（札幌医科大学附属病院）

X線CT認定技師は取得者が多くCTへの強い関心が窺える。この資格は、自己研鑽の動機づけ、これまで学んできたことに対する力試しとしての認識が強く、資格取得自体が目標とされることが多い。しかし、本来は取得した資格をどう活用するかが重要である。

本講演では、資格取得のメリットとデメリットを客観的に考察し、当院での事例から取得後の貢献度を中心に紹介する。その中で見えてきた認定資格取得と仕事の充実度の関係性についても言及したい。

「専門・認定技師の意義と実際～放射線治療～」

放射線治療専門委員会 佐々木文博（手稲溪仁会病院）

本講演では放射線治療に関わる専門・認定技師資格が発足された背景と診療報酬加算について概説する。また、当院の認定技師資格の取得状況と待遇を紹介し、資格取得におけるメリット、デメリットを洗い出す事によって、資格取得がもたらす個人や職場への効果について考察する。今後、検討しなければいけない課題としてコストパフォーマンス・タイムパフォーマンス・働き方の3つの側面から考えて、これから資格を取得しようとする人が増えるような内容を紹介する。

専門・認定技師の意義と実際～アンギオ～

アンギオ専門委員会 北 裕一（北海道循環器病院）

近年アンギオ領域では、タスクシフト・シェアにより診療放射線技師の清潔野介助が認められた事や、水晶体被ばくの線量限度改定など、より専門的な知識や技術、適切な放射線被ばく管理が求められるようになっていく。その中でアンギオ関係の認定資格である“血管撮影・インターベンション専門診療放射線技師”の役割は非常に重要になると考えられる。

本講演では、私がこのアンギオの認定資格を取得した理由、資格取得によるメリット・デメリット、当院での認定資格取得後の活用方法、今後の希望・資格取得が増える為の課題などについて述べていきたい。

「専門・認定技師の意義と実際～消化管&超音波～」

消化管&超音波専門委員会 松井 麻未（北海道対がん協会 札幌がん検診センター）

当協会では検診精度向上ならびに優れた知識や技術を持つ技師の育成のため、専門・認定資格の取得を推奨しており、検査を担当する技師は積極的な資格取得を求められている。

本講演では、当協会における資格取得までの流れを概説し、消化管および超音波に関する専門・認定資格について取得後の業務内容を紹介する。その中でも胃がん検診専門技師の業務として、医師の判定の補助となる技師読影を実施しているが、その方法について実際の症例を提示しながら説明していく。

また資格取得に関するメリット・デメリットを挙げながら、若手の資格取得へのハードルや取得後のモチベーション維持についての現状をお伝えする。

【専門・認定技師の意義と実際～マンモグラフィ～】

乳房画像専門委員会 堀田 浩（さっぽろ麻生乳腺甲状腺クリニック）

本講演では NPO 法人日本乳がん検診精度管理中央機構が認定する“検診マンモグラフィ撮影診療放射線技師”について、当院での経年状況を紹介し、専門委員が考える利点や課題をふまえた考察をしていく。施設の概要や職場環境に大きく影響されることではあるが、技師個人、施設や社会的な意義と実際に関し、スキルアップ、キャリアアップ、ステータスなど、より多くの方々に関心を持ち、認定を受ける、あるいは認定を育てる場に、ご参加いただく糸口としたい。

専門・認定技師の意義と実際 ～医療情報分野では～

医療情報専門委員会 濱口 裕行（北海道大学病院）

放射線技師が医療情報分野で取得する認定資格（認定技師／専門技師）は、医療情報技師や医用画像情報専門技師などいくつかある。それらの資格は、CT や放射線治療などモダリティの資格と違い、対象が放射線技師含めた医療職だけでなく、一般職も対象となっていることが多い。そのため、技師歴や学会参加歴を問われることがなく、働き出してすぐ取得することが可能で、学生でも取得できる資格となっている。しかし現状は、医療機関では他の分野の資格に比べて取得率が低めである。この理由の1つとして、医療情報関連の資格を取得する「意義」を知る機会が少ないことが挙げられる。シンポジウムでは、医療情報分野の資格に関して、「意義」だけでなく、資格を取得した際の「実際」についても解説し、資格取得の参考としていただきたい。

特別講演 1

特別講演

日本 X 線 CT 専門技師認定機構について

日本 X 線 CT 専門技師認定機構 代表理事 井田 義宏（藤田医科大学病院）

●背景

わが国の X 線 CT 装置保有台数は現在世界第一位であり、全世界の装置数の約 30% を占めている。また、現代の医療にとって X 線 CT 検査は必要不可欠となっていることは周知の事実である。しかし、現状の学校教育や国家試験の内容では標準医療に対応するには不十分であることや臨床現場においても CT の検査方法の施設間によるばらつきなど、必ずしも根拠に基づく検査方法が行われているとはいえない。また、最新技術への対応も不十分である。

これらの問題を改善するためには、X 線 CT 装置の進歩に伴う複雑化した技術への対応や、被ばく線量の管理などの専門性・安全性の担保が必要となる。また、疾患や治療法などに合わせた最適な検査技術を標準化することや CT に関わる新しい技術の有効性などを評価して、専門スキルを広く一般の医療現場へ普及させることも重要となる。

このような社会的要求を背景にして日本放射線技術学会、日本診療放射線技師会、日本医学放射線学会が協同して 2011 年に日本 X 線 CT 専門技師認定機構が設立された。

●目的および理念

当機構では、医療現場で X 線 CT 装置を使用する診療放射線技師を対象にして、標準医療に対応して臨床現場で活かされる資格となる「X 線 CT 認定技師」と、最先端の医療技術開発や検証などのより専門性の高い資

格としての「X線CT専門技師」の認定事業をそれぞれ行っている。今後、このX線CTの専門・認定制度の普及により、標準医療に基づいた画像情報を提供し、専門的でより質の高い検査技術の実践が可能となり、安全で安心な検査の提供が期待できる。また、相対的に被ばく線量の多いX線CT検査で撮影線量の最適化を行うことは、医療全体の患者被ばくの低減に貢献できると考えている。加えて関連学会等と連携し、最先端の医療技術に対応した検査技術の開発・検証・普及・安全を担保することで、X線CT検査の質の向上につながり、医療に対する国民の満足と安心に貢献し、福祉と社会の発展に寄与できると考えている。

●課題・展望

現状の課題としては、資格や活動に対するエビデンスがないことである。このため、X線CT認定技師の活動を計測し有効性の評価を行い、医療の質や医療安全への働きかけのエビデンスを実証することが肝要となる。目指すべき将来としては、診療放射線技師のスキルアップと仕事に対する専門性の持続を通じて品質保証を確立する。また、実証されたエビデンスによる国民への信頼をもとに、社会的対価（施設基準や診療報酬など）も得られる組織にしたいと考えている。さらにX線CT以外の診療放射線技師（技術者）の専門制度の連携により医療全体の中での標準化や人材育成も今後の課題である。

（参考資料）

- 特定非営利活動法人日本X線CT専門技師認定機構ウェブサイト (<https://www.ct-ninteikikou.jp/kikou/kikou1.html>)
- 井田義宏「チーム医療を支える専門技師認定制度ガイド X線CT認定技師/X線CT専門技師」 インナービジョン誌 INNERVISION (35・12) 2020 16-17

特別講演 1

日本血管撮影・インターベンション専門診療放射線技師 認定機構（JAPIR）の現状と今後の展望

順天堂大学保健医療学部 診療放射線学科 坂本 肇

血管撮影・IVR領域では手技の高度化・複雑化、新たな手技の導入、デバイスの発達や新たな開発などが恒常的に行われていることから、診療放射線技師には診断価値の高い画像や特殊な画像処理が要求され、常に新しい情報や知識、専門性の向上が必要な状況となっており、安全・安心で高度なチーム医療を提供し医療に貢献することが必須になっている。また、法令の改正などにより循環器用X線透視診断装置（血管撮影装置）による医療放射線の安全利用、線量記録や線量管理などの義務化、水晶体線量限度の引き下げによる従事者の放射線防護などへの対応も重要になっている。さらに今後は医師の働き方改革に伴うタスクシフト/シェアが求められ、血管撮影領域では診療放射線技師の業務内容（業務範囲）に大きな変化が予想されている。

現在、血管撮影・IVRを施行している全国の施設は2,000施設以上、稼働装置台数は3,700台程度であり、血管撮影・インターベンション専門診療放射線技師は約1,000名（認定試験回数：14回）となっていることから、高い知識と技術、また実践経験に優れた専門技師が更に多くの施設で必要になると考えられる。

認定機構では、臨床に役立つ実践的知識や放射線診療技術の向上、放射線安全管理の実施、タスクシフト/シェアに伴う新たな業務への対応支援など最新の医療技術を駆使した支援体制の確立、放射線機器の日常点検と保守点検による管理、放射線防護の最適化を図るため、認定講習会、機構主催セミナー、ワークショップなどの内容を充実させ、専門技師およびIVRに携わる診療放射線技師の教育、育成に努めていきたい。また、専門技師の認定・更新を構成団体との連携により統一的な基準を基に継続的に実施する。

認定・専門資格の施設対応について

市立旭川病院 中央放射線科 畑中 康裕

昨今、医療の進歩は目覚ましく、我々診療放射線技師においても、各モダリティの専門的な知識、技術の習得が求められている。認定・専門資格は、その分野で一定の水準を保証された人材として評価された証であると考え、資格取得を職場として推進していた。

しかし、従来から施設側には資格を「個人のもの」という認識があり、インセンティブの付与は無く、資格取得の学問的・金銭的なハードルの高さ、Covid-19の流行などのため、なかなか取得者が増えないのが現実であった。

このような閉塞的な状況の打破のため、最近当院では、医療の質向上と職員のモチベーションアップなどを期待して、認定・専門資格取得に向けて対応を整備した。

本講演では、認定・専門資格に対する当院の例について、管理職の立場からの私見を交えて紹介する。